

令和4年度滋賀短期大学卒業式式辞

びわ湖の水面に、暖かい春らしい風が吹くようになりました。この佳き日に晴れの卒業式を迎えることができうれしく思います。卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

ご臨席の保護者の方々も卒業するお子様の晴れ姿に、さぞお喜びのことと存じます。今回の卒業式は、久しぶりに保護者の方々にも一部ではありますが、会場にお入りいただきました。お入りいただけなかった方々には、オンラインでご覧いただいていると思いますが、お子様たちの成長された姿をよくご覧いただきたいと思ひます。

また本日は、ご来賓の方々も多数ご臨席いただいております。後ほどご紹介申し上げますが、ご多忙のなかお運びいただき、心より御礼申し上げます。

さて皆さんが入学した時は、入学式も距離をあけて座ってもらったり、保護者の方は入場できなかつたりなど、式典にも制約を設けていましたが、この13日にマスクの着用についての制約がゆるやかになったので、今日は卒業生の皆さんや教職員はマスクをはずすようにしました。お互いにマスクをしない顔を見るのは久しぶりかもしれませんが、表情を見ながら自由にコミュニケーションできるのが、やっぱり普通の社会のあり方なのだと私はほっとしています。

皆さんが入学した時、私はこの場で二つのことについてお話ししました。一つはこの学年に17人の留学生在がいたので、新しく日本にきて定住し始めている外国人の人たちと、もともと住んでいる日本人の間の交流に、1人の女子高校生がボランティア活動を通じて貢献しているという話をしました。彼女は普通の行政マンなどでは思いつかない方法で、地域社会の活性化に貢献しました。

今日この卒業生の中にも11人の留学生在がいます。留學生の人たちは、コロナ禍の中で困ったこともあったと思いますが、この滋賀短での2年間、楽しく過ごせたでしょうか。また日本人の学生諸君は、留學生の人とたちと交流することで、思いがけない発見があったでしょうか。短い期間ではありま

したが、滋賀短という場が、双方のささやかではあっても、意義のある国際交流になったことを願います。留学生の皆さんには、卒業してからも滋賀短のことを忘れず、皆さんの祖国と日本との懸け橋になってほしいと思います。

もう一つの話は、当時、ちょうど10年目を迎えた東北の大震災のことでした。宮城県に気仙沼という町がありますが、震災で大きな被害を受けた唐桑(からくわ)とい漁村に、震災後多くの若者のボランティアがやってきて、復興のための仕事に従事しました。そうしていく中で東京から唐桑に移住する人も出てきたり、海外から訪れる人もあったり、震災前とは一味違う唐桑に生まれ変わったのですが、それを生み出したのが若者たちの意欲的なとりくみだったという話でした。

二つの話とも共通するのは、若い人たちのあつい心と、それを実現するための積極的な行動力が、何かを変える力になったということでした。

さて皆さんは今日滋賀短を卒業し、新しい人生に向かって歩みを始めます。希望に満ちた旅立ちであってほしいと思いますが、残念ながら今の世界はバラ色の未来を必ずしも約束するものではありません。

コロナ禍はおさまったとしても、世界ではいろいろ理解できないことが起こっています。昨年2月から始まったウクライナ戦争は、まだ終息する気配もありません。これほど理不尽な戦争はないと思いますが、この戦争にどう対処するかで、国際関係が分断されるような重苦しい世界になっています。また今年2月には、トルコ・シリアでM7.8の大地震が起き、今わかっているだけでも5万2千人のかたが亡くなっています。日本の東日本大震災は、M9.0でしたが亡くなったのは1万6千人、そのうち津波による被害者が90%といわれます。安易に比較するのは不謹慎ですが、トルコ・シリア地震の場合、建物の崩壊による被害が圧倒的に多いようですから、建物の建て方に問題がある人災ではないかといわれるのも無理ないと思います。

理不尽な戦争や巨大な自然災害、それにウィルスによるパンデミック、これからの世界はどうなるのか、不安でいっぱいになります。

社会全体が不安になっているのは遠く離れた世界だけではなく、日本も決

して安泰ではありません。最近、私にとって衝撃的だったニュースは、昨年2022年に日本人で生まれた赤ちゃんの数が、80万をきって79万台になったというニュースです。これは海外で生まれた日本人も含みますから、日本で生まれた赤ちゃんだけなら77万くらいだそうです。皆さんの大多数が生まれた20年前だと115万くらいでした。20年間に30%以上減少したことになります。もしこのまま減少すると次の20年先には60万人を割り込んでいることが予想されます。

これを滋賀県だけで見ると、昨年度の出生者数は約9800、皆さんの生まれたころはまだ1万4千くらいありました。これもやはり30%くらい減っています。

このような出生者数の減少を少子化といい、それに高齢者の増加を合わせて少子高齢化社会の到来などと言っています。いま政府レベルでもこれに対する様々な施策が打ち出され、国会でも話題になってはいますが、そのような施策で本当に長期的な変化に対応できるか問題だとされています。

昨年度の出生者数が80万人を切ったといいましたが、それがどれほど深刻な問題になるかというのは、出生者数の変化を見てくるとわかるでしょう。日本は第二次世界大戦後、人口はどんどん増え続け、2008年には1億2800万でピークを迎えましたが、それ以後は減少の傾向に変わりました。出生者が減りだしたのはもう少し早く、1970年代半ばには200万以上だったのが、それからは減り始め、2016年に100万を切りました。そのあとの急激な減少は歯止めがきかないような勢いです。出生者が減っても人口が増えていたのは、人々の寿命が延びて高齢者が増えているためでしたが、それも効果が出なくなりました。

私自身は、1949年の生まれなのですが、実はこの前後の世代、これを団塊の世代と言いますが、出生者は年間270万人もありました。その世代が高度経済成長期に若い世代として社会を支えてきたわけです。しかしその世代も私のように高齢化してしまい、社会の活力を生み出す力とはいえなくなっています。

これからは少子高齢化、人口減少の下で、社会全体が縮んでいくことは避けられません。それにともなってあらゆる分野で深刻な問題が生じると予想

されています。

たとえば独り暮らしの高齢者が増加し、家族という社会の基礎単位が崩れていくといわれています。それにもなって医療や福祉の分野で、地域でのサービスが大幅に低下することが予想されます。地方での若い人口が少なくなることで、デパートや銀行、郵便局、病院などが維持できなくなります。マクドナルドやドトールコーヒーも、大幅に店舗が縮小されます。国立大学ですら地方では存続できないのではとまでいわれるほどです。

しかしここでこのような話をしたのは、これからこの深刻な事態の中で生きていく皆さんを不安がらせるためではありません。これから縮んでいく社会の中で、どうすればそれぞれが個性を生かして生き生きとしていけるような生活を守り、住んで楽しい活気のある街と子どもたちが伸び伸びと成長していけるような地域社会をつかっていくことができるのか、それを考え、かたちにしていくのは皆さんであることを言いたいからです。滋賀短で学んだ専門性を生かし、知恵を絞って考えぬいてください。その際、大事なのは決してばらばらにならないこと、しっかり仲間と一緒にやっていくという姿勢です。少ない資源をいかにうまく集中的に使うかが鍵になるでしょうが、みなさんの若い力を皆さん自身の未来のために生かしてください。それぞれが身近なところで地道な活動を通して、縮小していくけれど豊かで味わいのある地域社会を守っていく、それは皆さんだからこそできることだと思います。

2年間という短い間でしたが、滋賀短期大学という場を通じて皆さんがかげがえのない仲間づくりができたことを信じています。これをもって皆さんへの贈る言葉とします。

令和5年3月15日
滋賀短期大学学長
秋山元秀